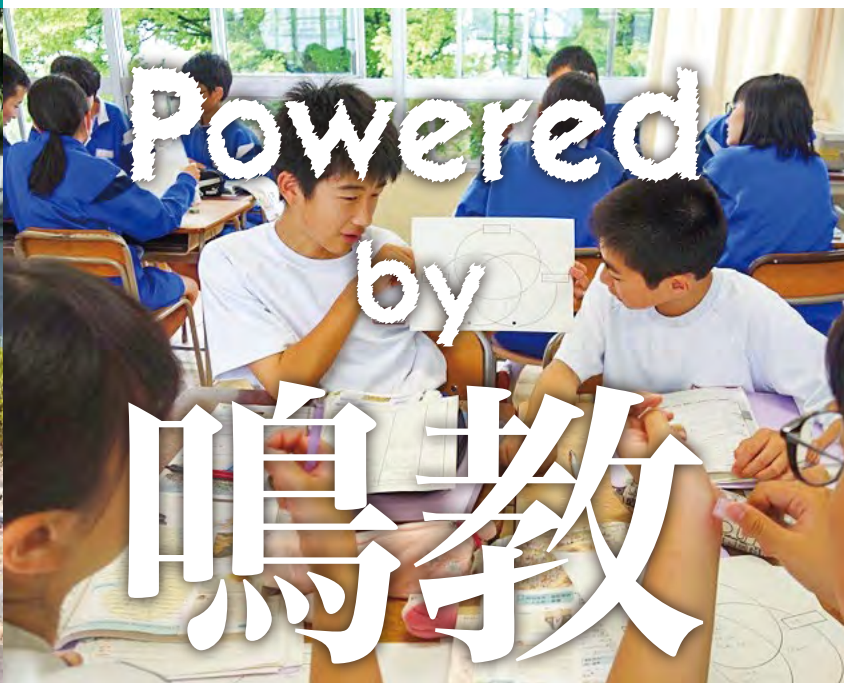


現在、将来にわたり、求められる教員像を探求しつつ、教育成果の検証を重ねながら、専門職業人としての教員を養成すること。それが鳴門教育大学・教職大学院のミッションです。

》 根拠のある助言をできるようになりたい

石原先生は、小学校と中学校の両方を経験され、ここ数年は中学校で学年主任を務めていた。学年主任を務めると様々なことを尋ねられる。そのときに、自分の経験でしか判断することができなかった。そこで、根拠をもって、こうしたらいいと言えるようになりたいと思い、教職大学院への進学を希望した。

石原先生は、教職人生の長さを考えると、授業以外のことが大事になる期間もあると考え、大学院に進学するなら、1つのことよりも、多様なことを学べる教職大学院へ行きたいと考えたという。



石原浩一先生

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース修了

CASE 10: 思考力の育成と評価

》 幅広い内容を学ぶことができた

石原先生は、教職大学院でとくに学んだことについて、次の4点を挙げた。1つ目は、思っていたより幅広い内容を学べたこと。もともとは授業づくりを主に学ぶつもりであったが、学校組織や生徒指導、教育相談、危機管理、学級経営、特別支援、小中連携など、幅広く学べたことが、すごく良かったという。

2つ目は、愛知県の当たり前が、全国の当たり前ではないことに気づくことができたこと。鳴門教育大学教職大学院には、全国から教員が派遣されてくる。そうした他県の教員と話をしたり、実習で徳島の学校を視察したりすることで、授業で大事にすること、指導案の形式、幼少連携などについて、愛知県との違いに気づき、視野を広げることができたという。



3つ目は、授業以外で、全国の学校の視察に行くことで、自らのこれまでの教育のあり方を振り返ることができたこと。長期休業などを利用して、著名な東京の中学校や、大阪の小学校など、いろんなところをみて、学べたことが良かったという。

4つ目は、学びを関連付ける体験ができたこと。学んでみると、鳴門教育大学の教職大学院では、いろんな授業がつながっている感覚があるという。とくにチーム総合演習では、各授業での学びをつなげて考えることができたという。主体的・対話的で深い学びで

は、学んだことをうまく関連づけさせることが大事であり、そういうことを実際に体感できたことが、良かったという。

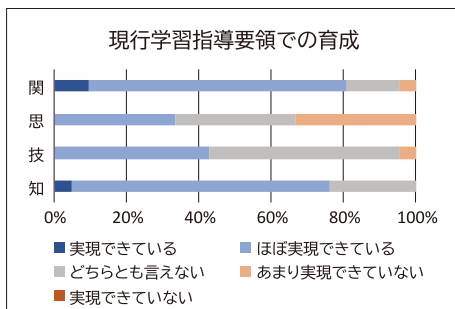
》 生徒の思考力の高まりを測定する

石原先生の実践研究のテーマは、社会科の授業における思考力育成と評価に関することである。石原先生は、現場で授業をやっていて、授業を「流す」ことはできるようになったが、生徒の思考力や意欲をどう

石原先生の研究概要

Research

置籍校は、愛知県の公立中学校である。置籍校の教員を対象とした質問紙調査から、思考力の育成に課題意識を感じていることが明らかとなった。また、全国的な調査からも、全国の多くの教員も同様の意識をもっていることが分かった。そこで、「思考力を高める授業のあり方を明らかにする」ことを目的とした実践研究に取り組むこととした。



置籍校における質問紙調査結果 (n=21)

Plan

先行研究を整理した結果、思考力の構成要素を下記4点と仮定し、各構成要素を高める手立てを授業に取入れることで思考力の育成を目指した。授業実践は、置籍校2年生を対象に社会科歴史的分野で2単元行った。研究の検証には、パフォーマンス評価を用いた。1年時に行った予備評価2回と実践後に行った評価2回を比較し、授業実践において思考力の高まりが認められたかどうかを考察することとした。

<p>思考技能 思考の結果を導くための具体的な手順についての知識とその運用技法(黒上ほか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●思考スキルの明示的指導 ●シンキングツールの活用 <p>【思考スキルの例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・比較する ・多面的にみる ・変化をとらえる ・理由付ける <p>(泰山ほか)</p>	<p>思考態度 困難な認知活動を推進しようとする意欲や態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ●思考力評価結果のフィードバック ●長期的ルーブリックを用いた思考力評価
<p>メタ認知 通常の認知活動をもう一段高いレベルから捉えた認知(三宮)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●OPPシート(堀)の活用 <p>【OPPシートの4要素】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元のタイトル ・単元前後の本体的な問い ・学習履歴 ・学習後の自己評価 	<p>領域固有の知識・理解 構造化された教科固有の知識・理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ●逆向き設計論(西岡)を踏まえた授業設計 ・本質的な問い、永続的理解、知の構造 <p>【逆向き設計論】</p> <p>「カリキュラム設計にあたって、教育目標、評価方法、学習経験と指導を三位一体のものとして設計することを提案するものである(西岡)」</p>

思考力の構成要素と手立て

やって評価すれば、生徒の頑張りに応えられるのかをずっと考えていたため、このテーマにしたという。

石原先生は、まず先行研究をもとに、思考力の定義や構成要素などを仮説として設定した。授業実践では、思考ツール、逆向き設計論、OPPシートなど、生徒の思考力を高める工夫を取り入れた。そして、パフォーマンス評価を用いて生徒の思考力を評価し、その変容を検証した。

石原先生は、実践研究の成果について次の3点を挙げた。第1の成果は、長期的ループリックで評価した結果、子どもの思考力の高まりが確認されたこと。

第2の成果は、生徒が自発的に思考ツールを社会科以外の教科や学校生活の場面で使うようになったこと。生徒会活動の掲示や、情報収集の手段として、生徒が思考ツールを活用している場面が見られたという。

第3の成果は、置籍校や市内の先生に、実践研究の成果を還元できたこと。置籍校の社会科の他の先生が、授業で思考ツールを活用したり、パフォーマンス課題をつくるなど、石原先生の実践研究の手立てを取

り入れてくれた。また、実践研究の成果を市内の小中学校の先生に話す機会も与えていただいたという。

石原先生は、実践研究の今後の課題として、次の2点を挙げた。第1は、与えた課題を提出できなかったり、なかなか思考力が伸びなかったりした生徒が、どこで躓っているのかを明確にして、そうした生徒の思考力を高める方法を明らかにすることである。

第2は、他の教師がより使いやすくなるように、実践の手立ての全体を簡略化することである。

▶▶ 若い教師のモデルになりたい

石原先生は、今後のキャリアの展望について、短期的には、働き方の効率化と、学び続けることを両立した、若い教師のモデルとなるような教師になりたいという。長期的には、より広い視野から、地域の教育に貢献できる教師になることを展望されていた。

思考力育成、思考スキル、思考力評価、パフォーマンス評価

Do

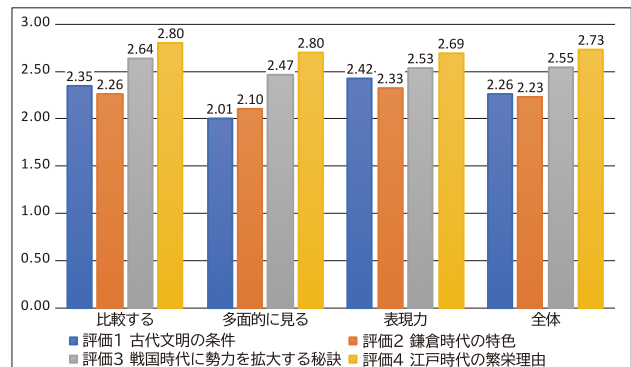
各単元の後半に、パフォーマンス課題に取り組む場面を設けた。個人で思考ツールに考えを整理した後、小集団で検討し合い、最後はレポートにまとめるという流れで行った。生徒は各自で「ベン図」や「フィッシュボーン」などの思考ツールを選択し、友達の助言や考えを基に加筆・修正しながら自分の考えを再構成していく姿が見られた。



思考ツールを基にレポートを作成する生徒

Check/Action

全4回行ったパフォーマンス課題への生徒の取組を、作成した長期的ループリックを用いて評価した結果が下のグラフである。さらに、分散分析を行い多重比較をしたところ、授業実践前後で思考力に有意な高まりが確認できた。4つの構成要素に対応した手立てを取り入れたことで、生徒の思考力が伸びたと考えられる。今後は、これらの手立てを日常的に取り入れていけるような学習サイクルを確立したい。



思考力評価結果の推移 (N=146)

「教員、人間としての器をより一層大きくする！」

教える自信と学ぶ謙虚さを育てる鳴教の教職大学院へ

教師力UP

頼れる、頼られる先生は、実践を省察し、学び続ける意欲を持ち続けているものです。より高い“教師力”を身に付けることをめざすなら、理論と実践の融合が特長の教職大学院が最適です。

学校力UP

指導教員は学生と共に勤務校を訪ね、1年次の学校課題アセスメント、2年次のフィールドワークを通じて課題解決を目指します。在学中も、勤務校にとって、大きなサポートが得られるのです。

地域力UP

教職大学院が目指すのは、リーダー教員の育成です。勤務校はもとより、地域の教育界に資する、学校や地域で指導力を発揮できる人材を育成するには、教職大学院を活用ください。



子どもの未来を切り拓く学校教育への追い風を

愛知県春日井市立東部中学校長 浅野 薫史

将来予測が難しい未来社会を生きる子どもたちに他と関わりながら自分の考えを深め、広げる中で、どんな状況でも対応できる力を育むことが学校教育に求められています。

このような中で、石原教諭は、大学院の実習生として「思考力を高める授業と学習評価の検討」を研究課題に掲げ、理論と実践の融合に取り組んできました。

思考力の定義を生徒と共有し、課題との出会わせ方を工夫する中で、生徒が自らの

考えを広げ、深める姿が授業実践のいたるところで見ることができました。また、具体的な評価方法の研究実践は教科指導の根幹にかかわる貴重な提案だと言えます。

本校だけでなく、より多くの学校、教師にこの研究実践が広がっていくことが、石原教諭の学びの成果になると思います。

「よし、一度やってみよう」この実践にふれた教師の授業力向上の追い風になってくれることを期待しています。

◆お問い合わせ

鳴門教育大学大学院 学校づくりマネジメントコース
生徒指導コース
学習指導力開発コース

令和元年度 大学院入試担当 大林正史准教授

E-mail : moobayashi@naruto-u.ac.jp

電話 : 088-687-6426